淡海 廿七 上

和書門 類
八六三二 號
一九四 函
一二 架
一四 冊

内閣文庫
和書 類
八六三二 號
一四 冊
一五〇 函
一一五 架

内閣文庫
番號	和 8632	
冊數	14 (14)	
函號	150	91

国立公文書館
National Archives of Japan

淡海 第二十七

寛文十二壬子年

一同年二月四日 讃岐守殿使者三原数馬以
去ル九年以後御代々

一同月十六日 天樹院殿 七回忌ニ付 傳通院
御法事相済候ニ付 白銀拾枚宛下之
銀子百枚 傳通院ニ 寺中ニ銀百枚 時役六尺
御奏者役傳通院ニ出

一同年二月廿一日 申刻 高田殿 御逝去

一同月廿四日 為御香奠 以使者 越後中将

明治十一年購求

光長へも銀千枚被下之、御座候ハヽ銀百
枚ニ而も之
一同廿七日高田殿御方法事、於大徳寺御執行
在之、御名代大屋但馬守参詣
一同年三月二日於評定所会、蜂屋平右衛門
其外同心於東金御番場為取扱之候捕之
為御褒美銀拾三枚被下之、但一人ニ
五枚ツヽ四人ニ三枚宛、二人ニ二枚宛
一同月廿八日、長崎奉行河野権右衛門被
召出、御加増九百石被仰付、但御加増九百石五百石都合

一同四月九日右衛門督殿より板倉筑後守
松平民部大輔、松平周防守同役ニ被仰付
之、元御小姓組番頭也
一同五月十四日御座之間ニ而、松平伊勢守被為
上意ニ者中勢守備ニ、年来御奉公全相勤候
上総田加増為御加増ニ万石被下之
越後攝州龍野、大坂迄所々付而以来
六万三千石ヲ得替被仰付之、右龍野ハ先
右為城地之万石以上之城ニ而死去、先年
被仰付之、但退去以後於法河為門

料銀三百五拾目 相済候ニ付 被仰付之

一同五月十六日 紀伊長福殿元服 於御座之間

院御前ニ而被成御一字 以前之 且又少将中将元

来国俊 代金子廿枚 御手自之 是孫 徳川常陸介保教ニ

一御太刀 備前光代金百 金廿枚 時給 常陸介殿献上

一綿百把 金子代 紀伊中納言殿献上

一五月廿六日 堀田上野介ニ而 松平伊勢守

備前守殿 御定 中務少輔 酒井修理

理大夫 八日 作付 為御吟味 二之丸

一同六月六日 依京都 以宿次 御会 是迄之

三之丸御遊覧ニ而 女一ノ宮江戸 御女中 頭理之

寄通り上 御種理遊覧之処 御殿所之

隣 御流 御頭 去年 永井伊

賀守 委細 伺之 付 達 言 聴之処 御殿

様子 御浪面 極之処 就而 慮達言絶

殿ニ付 依例 ニ流刑ニ処之旨

台命之 先月十三日 以次第 御伊賀

守 達 於庭 及叡聴 之 付 代 案 而 御

刑 去月廿九日 伊賀守宅ニ而 絶殿以居間

相掛金 同人ニ付 之 儀 而 様 之 終 寄

四月六日兵庫大坂ゟ出帆浦安左衛門
村瀬伊左衛門列座謹慎致候ニ付一通伊
賀守申渡之則伊賀守下知ニ随ひ
所越し近々越前国敦賀津迄越し
依例上陸無路ニ而送届し也直ニ依
之依例有之通相改帰著下船ニ而乗込し
合奉申 傳達し 私ニ去候致候ニ付就而
添和歌
おもひ立れしき婦なしのむらさきや散る花の香
此秋散りやすく 有る百花 さらしと云

一同月九日山上宗右衛門ゟ知行所稽古
調法有之候処拝借之者共是又彼百姓之列
仕地頭被仰付候ニ付右之趣申渡候ニ付
一同月十日松平新之丞近年銘病ニ付
之通願之通被仰付依之伊与守
松平中務殿ゟ仰付之
所知三拾三万五千四百石
同
三拾一万石余
加之外内外分田地
四万五千石
嫡子 松平伊豫守
次男 池田信濃守

其六郎太郎令出 松平備後守恒行兼為代
知恒行六歳ニ候ニ付於播州宍粟三万
石被下し 右六郎ハ六郎太郎光政依為四代
し間如此被下し 依し此度仮被下候之
本領之
岩万石今出ニ付 三男 池田主税 今播州ニ居
右之通何茂本領有分地ニ候付其上又
新太郎ヘ備中地之内拾万石ニ本領之通ニ仰
付上意之趣御取次讃岐守殿承
候由大和守但馬守因幡両所

一同年壬六月朔日 如例御礼 松平播磨守殿
守親昌 御前ニ而 依例備前之元宮
此方ヘ得御意候付 但為門掃
候下同ニ而候し
一同月五日 高松殿ニ而 孫市有栖川殿上
一同月六日 夜ノ八時分ニ西之保伊豆屋
敷ニ而萬化一つをさしはひ子宿ひ
和ニ壱人事依の松之おりく以上三人ニてちん
もなくひとかの子 かの夜 因而不 是非のあを
通りかかり千ノ勝何とやん 不安程之見へ候と

りめ申候ハゝ急度の返答可有之是非通り
とて当座田つき蔦屋をなけうち多へ
多り拾ひ手を書の者ハいかにもいぶりしく存
候て返答ニ申し候との事ニ可有之而
蔦屋を持出シ帰ニ人ハ書物寺の方江
通り候人ハ牧野長門守屋敷の方へ
通申し候与追出しひ申ハ二人ハ戸澤上総
之京町屋ニ金地院の門前の坂をとくり
本門之返入申候所金地院へ罷申候ニて
桐門おの町人方へ参申候 済申出来て

さがし候処見付申候ニ付何も罷退き申し
かし人罷申候時彼通申候者ハ存なくつり今
申候所ニ而通へ居候伊達遠江守屋敷の
方へ罷け申候ニ付内藤越中守へ作
補申候由寄ニて付ケ候申候ニ付別当居候
つゝ来り罷申候を彼の者申ハ私ハ土器町二
町目荻屋九兵衛と申 其件ともにハ
今宵新橋へ御入来存者それより
入様ひとつ来事所ニて切通しの下ニて荷の
荷物持参のたる事ニ申ハ 夜更道ニ掛

前々ゟ西久保え年々申候處兼々寺社奉行
え申上候得共毎度相済不申候所詮はからの相
手ニ罷成候何とも不存猶又擱置候と
書ノ者ニ申付相はからひ町中ノ[illegible]為
村方ゟ従付させ無之右段内證ゟ
達し候へとも不承速御用付候荒川小兵衛使
者を以委細申達候へとも則[illegible]中ゟ申達
候ニ付御用付候を以て[illegible]而返答
之趣所ニ沙汰宗[illegible]中醫師ゟ返書所ゟ
差置[illegible]居し其[illegible]出し常候ハ相[illegible]

松平右京大夫家来ニ而[illegible]捕之[illegible]不
通ニとめニ西川三左衛門トヤス[illegible]松平隠岐守
殿抱人ニ而新橋ニ而[illegible]かれ右仕
候所ニ而使ニ候由申候ニ付[illegible]候死
難をはから入させ何方へ[illegible]仲間
寺へ[illegible]申付其後御[illegible]書所まて
[illegible]候ニ付おとり後右中[illegible]も[illegible]仕
指遣申候ニ其人[illegible]無[illegible]を三左衛
[illegible]相掛を[illegible]の[illegible]候ニ[illegible]年々
中[illegible]を新申候ニ付[illegible]年[illegible]

此者ハ物しく候やうき者ニ候得共ハ召捕
籠舎縄付候、此滴しさらす様と申ニ付番所
存申候ハとうへ今申とのハ一向存様の申し分こ
まてハ無之しと存候家体ニ委申聞候一円
也ハ何とも悪事かと存候儀なと申立と
陳申無るそうる之由候ハ西之堀花や九兵衛
こて掛ケ候存無るもの、依て此義猶又こ
いら様の仮出来ニ付私方へて御此所ハかも
此者方こうけ申出候其所此滴しハ様相ハ
面者存又申候ハ存様ニ而御義も無之不届ニ

浮竹宗七事御貝付荒返旦那方申立ニ返
付御仕置貝付荒返第て其品見込此様走こ
手次御貝付荒へも御達此段存念之相こ
申越をたとへ先々見込候ても家体ハ悔申候様
無財分御仕置貝付と申先面書存て様子ニ
相改様伊奈右衛門牧野飛騨守両人迄申
且又金地院面書存通所町中へ遣書付
内存物过書者共縄付のとの何儀ハ筆
を様させ手に上こて彼首晒を申見此申し候
浮竹内にも死罪、たるへかり年来四十才ノ男也

首を打落し耳鼻をそき右紙に包み底
二ヶ所作り首をハかみす二ヶ所入夜打ハ
下帯も取れいう紙に包み是を常不
宿所にかくし置る又本のことく右町人
之討左衛門付屍を申付る御節のため（段右衛門カ）
沢く宇田町ニ在ル　るきや何かしト云
ものゝ家々の中にハ私惨当夏十八歳に　五郎兵衛金
子盛振舞金をも出させ以其　要々一昨々年
ま今帰り茶屋ハ実之吉兵衛殺しにおこるりこと
存し道より一も出道当に而宿屋にもの出当座に

御台大形私惨の死骸やと申るに一同出たん
せん為に於是申ハ当当て在申ハいい死ござ之是信
同村屍　討ゆ在ハ上ハ御て事承候て平上
出申し掛の死骸ハ四十才男と相見ル候在
方申スといふ年頃相違ニ候而　平ゝ惨ニて在
右男勢と申ハ□も　安佐ハ知し　在候て又在
相互ニ八日ニ相果土佐当下屋敷當其者ニ云
四月朔日に如房　过当所ニ年月當在て遊紙
史出雲一昨々　在之今帰り茶屋ハ依
之出候を出院に相付申ハ中ゝ以降ハ出屋敷

し過当所ニ而ハ家内死罪ニ治定候処 猶又
甲斐国ノ由ニ候得共 夫ハ未落着ニ付 当所ニ而者
在住候と存候ニ付見合せ候ニ付 相伺候ニ付
八代死罪ハ松平隠岐守殿御抱持人西川
ニ所右之事ニ付 左仕ニ而も見合 自分ニ而
ニ被成候由 隠岐守家来共ニ付 相伺候 千方
申ニハ 未違之候 夫ニ而者当方ニ被仰付候ニ付 申梅
ハ疑敷所も有之 未落着ニ付 一旦者西川
ニ所右之事ニ付 私共 未落着ニ付 候得者
ごし申候ニ付 未落着 御家宅ニ而 右ニ下拵候

隠岐守様御抱持人太兵衛召捕候 又家来者
ニ所右之事ニ付 留守ニ而 御座候 寺社奉行之死罪ニ成 寺
社奉行之御見合ニ付 留守居申候へ者 右寺
奉行所ニ而 金子ニ而申付候由ニ付 最早候とて町
奉行所ニ而 其外之付 同心二人ニ而 召捕申候
女房ニ付 死罪之儀を見合せ 申候 此節
同村尻分候 役人同村 之村へ村申付候 ...
同心ニ而見合せ申候 御無役人ニ而 由ニ而村
其外切支丹見合せ 此外 御縄ニて 相済候
ニ而 御座候 申入候付 町奉行 同心ニも 相渡申候

悔り申候所へ御上ケ被成及極晩町同心
罷出御徒目付罷出女房共召出し
出し候所不審成ル死骸を女之身元申し
合せ候得共剣村之物女と見知申し候女の
親類とも弐人来り庭ニて見申候得とも
まへ小所ニ而ちき候者へ極り申候先死骸
と申候者ニ而理申候も千願ハ又寺之所へ御
不申上る程御座候て女房をば致し申候
御徒目付も同心も悔り申候壬刻比九ッ
時御徒目付罷二人共参り候女房も

参候御徒目付罷り申候昨夜御寺之所へ
参死骸ニ候由申上候然所申所御届
ありし由申上候ニ付御徒目付罷り申候も
御目付罷り何共ふと然ル所手合を
相尋ねられ候依之ニて二人之内壱人
之御寺へ又参候死骸ハ如何様ニも候へ
届ケ申候ハ女ハ如何様ニ相御徒目付
御申候ハ宗旨之法地宗旨法花宗ニ御座
宗体を吟味不届ニ申候ハ御当方宗旨ニ御座候ハ
急度不届成もの仕しかと其上付御届申上

継之成候ハ不仕合と存出 自分不埒ニ而上仕ハ
上ハ家来ニ罷成候 主分来ニ返とんしやうよ
申候ニハ不届成段家来ニ而候得 家来
之儀法申 付主殺候ニ而も 仕返候様ニ継式
主分中ニ而も 仕置ニハ 無用ハ不届仕
指出候者 此主分之の儀ニ付も 外之例ニ而候者
ニ付 死罪ニ仕置申 御申合 主申付
とりの上も主人ニ候ハゝ 此段届申候ハゝ
やうよて申上候 御目付方ニ而 申付 事
中ゝ申出候 意ニ申付 御家来本之儀

其やり方者ハ家来 他方へ申出ハ家来ハ両
久保之自分の所存ニ而申候ハ不届申候八
其上追 御目付方 存シ 使ニ遣候上者
一 人之上ニ而他所へ遣し申候 御目付方
一 留守居 常申ニ付 此旨申渡 家来之成共死罪
縄付候ニ申渡 自然 法ニ 書付申渡候ハ
家来共も無筆ニ而ても 主人ニも 申渡し 主家
来も不申而 家来ニハ其主人 不申而 不届
一 隠候ハゝ 大勢ニ候とも 不届 御目付方
一 申之 閏之十日ニ 本所御目付方

以使番ニ而宗休年寄ニ而[illegible]ニ而 其後ハ
主ヲ為念用ニ而宗休ハ是迄ニ而[illegible]
相尋候得共返答ニ不及候間[illegible]御縄付
死体ハ宗休死骸と女ニ相渡されし縄付ハ来り
所ニ門前ニ而手渡いたし候 [illegible]
一 両町名主人挨拶　医師 流船宗休
一 両町年寄　稲生[illegible]
是ハ一両年已前ニ在所ニ而右宗休女房を殺害ニ
大勢ハ此[illegible] 本人の[illegible] 妻子ニ而母[illegible]人と
日利く逃て二年[illegible] [illegible]所[illegible]へ[illegible]

かし浮田渡し 七日 於当所地ニと[illegible]
一 米谷町 庄三郎方ニ而縫師[illegible]と同所[illegible]女房
一 三条右衛門ハ加賀町し大工[illegible]所ニ而殺申候
一 右縄付し其名ハ与三郎と申ニ而三条右衛門[illegible]
一 三条右衛門女房侍[illegible]三条右衛門[illegible] 女房
三条右衛門同姓一人流船宗休三条右衛門[illegible]
其外人縄付 其上公儀[illegible]捕 手渡 縄付
ニ 相子 委細申尋ハ上宗休 三条右衛門女房
[illegible]逃し[illegible]手前ハ[illegible]
一 三条右衛門 庄三郎ハ 七日し[illegible]

壱人相乗可申付候ニ付而上覧之節ハ相
者右之捕物ニ付可申達、壱人出て下知し
一御庭之者ハ松平右近将監同様中ニ而より
数十人追手之者共差添、右捕物ニ付而ハ
し候様ニ被仰渡 候よし
一三日之右共ハ ちよりつけて 不ニ而御座候
候上り申候

此按上様御仕置方之節三ケ条申上ケハ不可有之哉与御仕置
御前ニ而召候而今此者御申不申、本之追一件ニ而も有之候ニ付
改メテも御四年ノ申 御免不分候得共大概ハ先之御条ハ松平右京
之亮、永井とアル二又松平阿波守ハ川トらし分ケハなり候由
追一件ハ村史 可考へきこと 不金ノ有る記

一同年十二月十八日 於御城中 あわく座
敷ニ而御目見被仰付 園部 御方不
所付ニ日光御門主ニ追放し御使者
ハ座敷ニ於御中彼等御左日光御門主中追
放し御申し遣、右召所之外御使衆人ハ日光御門
ニ追放 市中之者ハ 御三所此之人ハ 料を可
相渡候、然し世之中ニ而も右御答以之付ニ御仰付
一同月十八日 御使 王縄 御家来中ニ依而為
樹院殿 母公御菩提所 寺院 捨石 御当
追申しら 相合 於上方 右中 御座候

一同年ニ漁夫共松寺ニ参地為古例之処
物成地ニ住居之者共ニ依御沙汰被遣
之候付し但右松寺ニ到水肥之林焼
一同日　琉球　薩摩大明神　社人年人被任
事不届之付ヲ　社伐　十里四方追放ニ被付
候之尾年人　子之水　傲い社職　ニ而相勤候也
一同年九月十二日　琉球王使者として為御
礼出来ニ而来年之時　前尾好　御目見依
而国令度　為御礼　薩摩ニ而　賞銀兵
家之持抱　御松平大隅守　老人ニ参上之

所謂　一安香十包　一香　線香　五百会
一蓮花蕉布十端　一細布　十疋　一寧覆端
三束　右之通献上之
一同九月廿八日　板倉筑後守　嫡子石見守同年
陸為喪子見　御番帳　就病身同性内
勝西由民　職ニ　石見守ニ　被仰付し但石見
守ハ千次郎ヲ　筑後守ニ可之家　嫡ニ因之
一同十月五日　奥平大膳亮　名を左遠江守
子大次郎ハ　被仰付し右松平右近守　大久保
加賀守　右之人　右三人ト　加賀中務

彦左衛門儀ハ　小次郎　実父ハ　相渡
候者也　是ハ奥平市　御預　相止
一同十二月廿三日　浅草御門　同所出家之　道心
七兵衛与申者　去ル十日　夜中ニ　左ニ為之
迷見　吉三郎　土橋彦太夫与申者　妻ニ　組頭ニ　相尋
吉三郎ト云　平ノ　首の　以上三人　の札　立ニ　火
ニ七兵衛　宅へ　見届申候　七兵衛　在家
今尉　役候　仍之　其外　被　不申　右之　衆衆
一うらり　亡　乱心之　由を　左衛門　使申　公
但　当分預候　右之　吉三郎　其外　之人　是ニ　仕置　候者　家

在家共ハ　当人ニ　申付　ル

寛文十三癸丑年 今年九月廿一日改元延宝ト成リ

一今年四月五日大久保右京亮組ノ小普請
京須宇兵衛と申者不届之儀有之ニ付
而御改易と被仰付右京亮宅へ招
し大目付渡部当申渡し

一同月六日三井加右衛門名倒ニ而右衛門儀
市兵衛御勘気不届之儀ニ付遠嶋と被仰付候

旨於浄延不承貴付同日漆原左衛門兵衛
同付並法源左衛門申渡
一同年十月六日浅野方細谷長兵衛平松
平蔵知也書上町人近所不届ニ付処酒井
能登守家来三人所々会所ニ而帰左衛門へ申付
殺候ニ付為検使能登守家来兵衛同伴ニ而
ニ三人来ニ而切殺但一人十兒小性二人ニ
追付候より
一同五月廿六日夜八ツ時ノ丑刻ニ俄ニ出火同
周防加兵衛同九ツ半刻迄京中焼失
依之 禁裏 院中 所司代四條ニ而
三条京町中野家焼失へ
一中務　一少納言　一権少納言
一陣官人二人　一法務忠之丞　一右衛門督二人
一大蔵卿　一弾正台　一参宗
一主殿二人　一内舎人　一左大史
一寫典十二人　一左大史　一右大吏
一舞人所の人　一所作方五人　一所車役二人
一如何　一兵部省役人十一人　一小西中務人十三人

一十四町中寺人（白院門末）　二人
以上百三人
町数合百拾町
家数合二千六百二十軒之内
禁裡方　寺一軒
新院御所方　十三軒
右町之内醫師　此同二件　山脇道作
半井陽宮　観東春庵
○寺数合十八ヶ寺
此外番所之寺数十七アリ一軒ニ入

浄華院
法性寺
迎勝寺
極楽寺
本如寺　同寺中拾二軒
安楽院
光明寺
本満寺
十念寺

本禅寺　同寺中廿五軒
大恩寺
西光院　同寺中四軒
東北院
立本寺　同寺中十五軒
相国寺　同寺中六十軒
慈福寺
仏陀寺

○下鴨　川社　一ヶ所　神宮寺堂　一ヶ所
末社　廿ヶ所
此云是ハ何レノ社ノ末社カヤ神宮寺ノカ
社僧屋敷　一ヶ所　是も神宮寺ノカ
百姓家十二軒
下鴨并下掃多村家数十三軒
同所下福寺堂　一ヶ所　民部屋敷　一ヶ所
一同年十一月十七日　水谷左京亮儀分差入
十二月十二日　備前屋侍屋敷并町屋も外

百姓屋敷迄焼ル　本百姓一軒　潭流但此八人預
し也御足へ出外体可捕ヘ　又死因協議　清水
へ入申候
一同十九日加茂加羽屋山崎屋儀　山崎新解中申分
き差十三日十三日に清水へ入申候
一同年六月朔日　大膳月時為清大名屯
宮仲庭抜安内揚江豊維持次　鉢中宮室
死去候　御月見無し　鉢中宮堂ハ檜山浄正
大坂表り
一同八月

林中へ　金子拾両 御広敷 二反　御役中
法皇様へ　金子十枚 御広敷 二反
本院様へ　御樽 壱荷
新院様へ　銀三百枚 御広敷 一反　御役 三十
女院様へ　金五十両 御樽 壱荷
女三宮へ　銀五十枚
右之通ニ而進ル　是ハ去年正月　御献上之節

又
銀十枚宛　長橋局 伝奏 宣旨
銀弐百枚　林中女中へ
銀三百枚　法皇様女中へ
銀四百枚　新院様女中へ
銀五百枚　女院様御附女中へ
右之通りとなし

一同年五月　西本願寺為上使但下ゟ出仕御使
之旨限言被仰出旨被申し

一同年七七月書　百人一種

和哥ハ法皇御所　安禾ハ女院御所

博学ハ弘文院　理学ハ伊藤源佐

心学ハ熊沢了戒　朱子学ハ山崎嘉右衛門

仁世道ハ本屋八兵衛　神道ハ吉川惟則

仏法ハ黄檗隠元　仏学ハ智積院運敞

医師ハ向井元升　計法ハ柳川了長

鍼医ハ親康寿庵　茶事ハ鳥山[illegible]

画師ハ狩野探幽　楽ハ辻伊兵衛尉

琴ハ藪殿　蒔絵師ハ田中長左衛門

能ハ宝生大夫　謡ハ喜多七大夫

ワキハ春藤六左衛門　小鼓ハ観世新九郎

太鼓ハ金春又右衛門　大鼓ハ葛野九郎兵衛

狂言ハ大蔵弥右衛門　舞ハ幸若伊右衛門

平家ハ何都検校　三絃ハ浅利検校

談義ハ乃々性坊　立花ハ池坊

かうちハ平川左六　香具ハ松隠丹後

蹴鞠ハ飛鳥井殿　囲碁ハ道策

象戯ハ宗看
弓ハ星野勘左衛門
浄瑠理ハ草苑[illegible]
傾城ハ[illegible]藻
俳[illegible]ハ[illegible]眠
刃刀ハ埋忠
執権ハ板倉周防守
連哥ハ祖伯
塗師ハ長恵
又茶湯ハ宗旦

中象戯ハ河内屋金伍
流経ハ日向[illegible]大夫
和年板ハ上村右源
精ハ尽長
菓子ハ二口屋能登
焼物ハ御室仁清
伽羅ハ朱川宗佑
誹諧ハ西山宗因
歌集ハ松平加賀守 判 信
佐ハ僧ハ光也寺

茶会ハ宗和代
醫者ハ山下宗琢
軍法ハ北條安房守
悪人ハ赤塚雲庵
表具ハ井家友甫
目利ハ本阿弥三之法
兵法ハ柳生飛騨守
能役者ハ肝煎知雲
料理人者ハ那須閑之竹
蒔絵ハ安和[illegible]

手跡ハ如遠青蓮院
揚弓ハ立花ノ宗休
情緒ハ法筆宗
筆ハ素也
調子方ハ里哥都
古筆目利ハ了栄
有職ハ僧人敷
大工ハ中井主水
乙川者ハ七十郎之
入湯儒者ハ荒川宗元

組細工ハ蘭谷　武士衆ハ井筒や平三郎
勝負衆ハ平田弥兵衛　大よくハ知恩院方丈全磨
会所ハ四条や　一院ハ百万遍ノ方丈
庭園らいものハ慈照院　浪人ハ京極安智
つき物ハ鹿苑寺　庭作りハ地下人童松
杜作りハ佛や平兵衛　立花ハ六角池坊
化満ハ宗や宗和院 甲ハ早乙アリ　手跡ものハ大嶋院
彫物ハ後藤四兵衛　呉服好きハ橋本勘兵衛
物知出家ハ大徳寺坊主　平家かたりハ宗佳性院
碁打なるハ本因坊　文盲なるハ浄土坊主

茶ハ上林　酒ハ奈良
絹ハ波阜　紙ハ近江
威ハ源平盛衰記
此後ニ万人一揆九千九揆アリ　下ハ足利ノ代
写シ并書ニ之アリ

一右所謂節季九月分東部大日寺牧秘花
家書　如花
東北
かうちゆへハ天地をうごかし　半織をくるしむ
ることゞざ神仏仏院のめしたち　ハ何より

討時めく花の紋雲井の空の余波を
涼しき心をいかくく天下ふ肯く差上女
も所ハ九重の萬代の後竹みて主城の
鬼門の方々も思靈を清ふ大風のたゞ
一 八尾白の西宮と本府橋の方より焼
おろのしき八焼亡といふ事とかや危ふ
没こ月をおろし臣の尻ハ多く表門
お入雅気おかめく不死をうけ了補
ときけごろめくみさ毎ハ当おく大子の
まえ下兄梅りの武の数し君思の犯

一 源と矢へも同夜鉄砲不堂めいる楚花
仙洞も残りまた焼果ありとおもふ也
焚の庭の方へ行まへ一さい乃石家を保て
行事をいたらせこまらに様しまり下く
進も刀をとぬ本国の上使の附色ぞ今を
侍かさり 装の夜のしたゞのハ独りし
庭入ちる 夜気こしをみく祢 祢やハ中かく
寛くややちらにて 較ふくいれむりしとよし
あや今宵ふとひおれハ称あらしあつら
しや急しき在具をおぢ こちく人ふ

とらんもちかりし時金やとやさん吉吉々
金ハなし今ハ此川のとかりハなし見れハふ
ゑうて帰るとて宮この焼野とてくき
とや狂人やらん家して物をかたて
ひつ舞謡なとして宮この舞ふまひし
ゑらし人とみえ申り狂人とありける

狂歌

四の内の狂ハ実も多く御陵の所あらハ狂隅播政
とるのたるの大たるハ面家戯大車におされて逝る主君

一同年と吉田伊賀守信俊信政家来隅色

吉十郎為是彩物と云ものありて吉子遅申し府
伊賀守政信吉兼右兵衛人も述候ても
家中し面々乃会沙汰とも存し上申政治
し所大竿市し家見伊賀守と云ものにて安
吉申史覧申し付梅若ハ其人にて梅若
と申も下と中付ハ天暦年十月十五日隅田
川例一月院と云寺と傳在候奉紙一
両一樹安宅二通以上女人此寺に存申候
その中一両と添吉十郎に見へ候ま
ち候あひかね共候ときらんと付て然を

恭純之ニさうり　徽中山へ右恭純共ニ相抱
中山二人ニ生害有候の　老母ハ又ハ兎方ニ
所ニ預ケ一両依之ヲ継之子共跡来
永久被遣候とかく此者時依也表九郎所
之し、しき之此御人遠右之ニ入おかれ
不候さて如しき之子孫之ハ其子孫

一同年四月　右八日　家門御同酒井雅楽頭稲
葉美濃守久世大和守土屋但馬守本多中務
様迄参向居申　一双死去ト　但松平
同候之依福守今千候

一同年五月　松平右京亮　先代死去之実
子無之ニ付兄弟之遺跡之継子ニ仕度旨相願
通ニ御付家来一万石ハ縮り兄弟相当
依為之事ハ問　御相当心得ノ壱万石継
一福原清次郎ハ通　隠居ヲ继所
知行之内五百石之問
　四千石
　五百石
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　養
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　福原　隠相
　　　　　　　　　　　　　　　　　　日
　　　　　　　　　　　　　　　　　　福原　次郎七
右之通ニ分ケ被下候　御依頼也

右此談海一部二十七巻者兼日依懇望乞求之以久津見氏藤息信之藏本寫之予去ル享保甲子年中以此本素讀、其砌彼是為要文抜書今亦再乞貸而企全部之書寫既遂筆功依而廢捨彼要文抜書猶書中有字誤落久欲重而可遂改吟而耳 但此本書二十冊也予書寫之砌合冊為十巻且全部之内事跡不分明品間多是加書

愚按知之以政守令蒙愚按首者也
後覧察乎
維時
元文四己未稔林鐘仲一日午上尅
起筆翌年庚申姑洗仲八日巳下
尅終毫之
多賀氏中原常政誌之

談海三十七巻不詳撰者之姓氏編年記事瑣
細以載上起慶長十年下終寛文十三年凡六十
有九年矣雖見聞之所記也大足補国史之闕
矣辛亥夏訪多賀翁々以元文中所手写之本
賜之曰以子之親炙有日奉々無懈敢以与之
章玲童時翁歳八十有五元文距今五十三年
蓋翁三十三歳之所手写也云書云人何可不
珍重乎詩云慮汝之義人々貽　守篁
主系有書

日本政府圖書

癖淂之拱璧不啻欣躍何堪謹藏篋中
謹記巻端敢無忘翁之澤云爾
寛政二年辛亥五月八日
近藤藤原守重記

近藤守重藏多賀常政翁所贈談海二十
七巻予亦藏翁所贈政談四巻然予旧所藏
有政談一本故併翁所贈藏二本因以一本
換此書爲家藏云爾

寛政五癸丑年冬十月
藤原忠寄識

文化七庚午年寫之
源経泰

日本政府図書

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan